

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 8 月 11 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26381067

研究課題名(和文) 地域資源の掘り起こしと学習文化活動の循環プロセスに関する実証研究

研究課題名(英文) The interaction of finding cultural resources in community and learning activity

研究代表者

新藤 浩伸 (SHINDO, HIRONOBU)

東京大学・大学院教育学研究科(教育学部)・准教授

研究者番号：70460269

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、教育文化施設が援助者として関わりながら、地域資源の掘り起こしを通じて学習文化活動が行なわれるプロセスに注目する。そして、歴史調査とフィールド調査を通じて、地域資源の掘り起こしと学習文化活動の関係について探ることを目的とする。

(1) 常民大学を中心的事例にした学習文化活動の歴史研究、(2) 学習文化活動を援助する教育文化施設の実態調査を行った。

その結果、歴史や生活習慣、伝統文化等、地域に身近な資源を活用した市民が学習文化活動を行ってきた歴史、そして活動の拠点として公共ホールや博物館といった文化施設が重要な役割を果たしてきたことを明らかにした。

研究成果の概要(英文)： The aim of this research project is to clarify the process of learning activity through finding cultural resources in community, supported by cultural institutions such as museums and public halls. Through historical and field research, this project examines an interaction of finding cultural resources in community and learning activity.

We conducted the research on history and present of learning activities in communities in Japan, focusing on "Jomin Daigaku" (People's college), founded by Soichiro Goto(1935-2004) in 1970s. And we also examined how cultural institutions support these activities.

Through the research, we revealed the history of learning activity in Japan in terms of cultural resources in communities; local history, traditional cultures, folklores, etc. We also mentioned that cultural institutions have played an important role to support those activities.

研究分野：教育学、社会教育、生涯学習

キーワード：常民大学 社会教育 生涯学習 柳田国男 文化施設 教育史 戦後史 民俗学

1. 研究開始当初の背景

近年、国内外の社会科学研究でコミュニティへの研究関心が高まり、コールマン、パットナムらを嚆矢として、人々の信頼関係や互酬性に注目したソーシャル・キャピタル研究が様々になされている。日本においても、地域や人々の生活実態に応じたソーシャル・キャピタル研究が進んでいる。さらに、民俗学や人類学の観点から、地域における生活知や習俗知を、地域資源として掘り起こす研究もみられる。

第二次大戦後、日本全体が農村の近代化や貧困の克服をめざしてきたし、教育学研究も、農村近代化といった前近代性の克服がめざされてきた。しかし近年、特に東日本大震災以後、高度成長期やバブル期にはさほど価値あるものとしてみなされなかった、地域の生活や習俗のなかにある知が注目されつつある。

これに対して教育学研究も、従来型の行政による権利保障をめざした制度や実践の設計の構想から、前述のソーシャル・キャピタル研究のほか、民俗学への注目、持続可能な発展のための教育(ESD)への注目など、環境に配慮しながら、必ずしも右肩上がりの成長をめざさない、社会や地域の持続を志向する考え方も登場している。

本研究も、こうした社会の動向および研究の現状のうえに位置づく。現在求められているのは、市民ひとりひとりが、みずからの生活圏域や歴史や生活のなかにねむる知を掘り起こし、防災や福祉などを含めたコミュニティにおける学習文化活動を充実させていくことにあるといえる。

こうした志向性をもつ実践は、歴史的には社会教育活動のなかで蓄積がなされてきたほか、近年では地域学や地元学などとよばれることもある。本研究で注目するのは、民俗学・人類学的アプローチから地域資源を掘り起こす過程が学習・文化活動となる

循環的な関係と(課題1)、その関係を援助する博物館のような教育文化施設などの第三者的な主体がどうかかわるか(課題2)、さらにはそれらの相互関係のありかたを解き明かすことにある。

2. 研究の目的

本研究は、教育文化施設が援助者として関わりながら、地域資源の掘り起こしを通じて学習文化活動が行なわれるプロセスに注目する。そして、フィールド調査を通じて、地域資源の掘り起こしと学習文化活動についての循環構造のモデルを実証的に提案することを目的とする。

歴史や生活習慣、伝統文化等、地域に身近な資源を活用した市民が学習文化活動を行なう実態が広がる中、その可能性を探求すべく、①常民大学を中心的事例にした学習文化活動の実証調査、②学習文化活動を援助する教育文化施設の実態調査を、3年間の調査を通じて行なう。この調査を通じて、少子高齢化の進む今後の日本社会において、地域資源を活かしながら、生活圏のなかで充実した暮らしを営んでいけるためのモデルを提案することが、本研究のねらいである。

3. 研究の方法

本研究は、常民大学を中心とした学習文化活動(課題1)、活動を支える教育文化施設(課題2)に対して、現地訪問およびヒアリング調査を中心に実施していく。申請者含む研究チームを組織し、毎月1回定例研究会を開催しながら進めていく。

国内訪問調査は、メンバーが数名でチームを組み、分担して進めていくこととする。

4. 研究成果

【平成26年度】

以下の調査を行いつつ、公開講座・講演等も行いながら、教育・学習の現場との協

働的な探究をめざしてきた。

第一に、日常生活に眠る知を掘り起こす教育学研究の枠組みの探究を行った。特に、後藤総一郎が主宰し全国で展開した「常民大学」について、定例的な研究会を行いながら各地の常民大学の歩みの調査を行い、その実践の意義について検討した。

第二に、日常生活における学習活動の拠点である教育・文化施設の状況について、好況ホールに注目し、その歴史を単著にまとめたほか、国際学会において日本独自の好況ホールの歴史について報告し、比較研究の可能性を開拓した。

第三に、同様の視点から博物館および公民館に注目した。地域学習の拠点として博物館が果たしてきた役割について国内外の調査を実施したほか、その担い手としての学芸員に注目し、かれらの教育への意識に関する質的・量的調査を行った。公民館については複数の自治体で共同調査を行い、各地域における公民館の可能性と課題について報告した。

【平成 27 年度】

第一に、本研究の柱の一つである常民大学の追加調査が良好な進展をみせた。各地の追加調査をほぼ終え、成果をまとめ、28 年度中に書籍刊行用の原稿を整えるめどを立てることができた。近代日本において、知識人による啓蒙運動としての自主的な学習結社は各地に展開した。それはインフォーマルな学習の機会となり、さらに地域を形成する基盤となってきた歴史がみえてきた。

第二に、もう一つの柱である施設研究については、学芸員の方々との研究交流も含めて実施した。その結果、地域において人が集まり、ものや資料を通じて触発し合う場としての博物館のあり方を提起する書籍を、平成 28 年度中に刊行するめどを立て

ることができた。

第三に、比較の視野から、本研究の理論的基盤にもなる成人教育と文化に関する書籍を翻訳刊行した。また、ドイツ、イギリスの関係者が登壇するシンポジウムで、日本の生涯学習の現状を報告しつつ、交流した。

【平成 28 年度】

最終年度として、研究成果のとりまとめを行った。博物館や劇場等の文化施設と地域の関係についての研究成果を発表したほか、最大の成果として以下の書籍を刊行した（北田耕也監修、地域文化研究会編『地域に根ざす民衆文化の創造 「常民大学」の総合的研究』藤原書店、2016）。常民大学は、民俗思想史が専門の後藤総一郎により 1970 年代後半に長野県で始まり、市民が自主的に学ぶ場となってきた。近世以前も視野に入れつつ、明治以降の自主的な学習運動を源流、前史として位置付けながら、遠山、飯田、遠州、鎌倉、遠野、立川など各地で行われた「常民大学」の実践を記録し、社会教育史上の意義を位置付けたものである。研究者、元自治体職員、市民学習者など 21 名の執筆による、600 ページ近い重厚な成果となった。

本研究を通して、以下の成果と課題を得た。(1) 地域の課題を人々の学習活動により解決に向けていくという意味で、教育学と民俗学には接点がある。後藤と常民大学の実践、あるいはその思想の源流でもある柳田国男はそうした思いに突き動かされていたのではないかと考えられる。(2) 公的に整備された学校以外でも、自発的結社の形での学習組織の歴史があり、学校においても郷土学習の歴史がある。これまでの社会教育研究と実践は、地域の歴史や伝統文化を封建遺制としてネガティブに捉えてきた面があるが、そのあり方を問い直し、学

校内外の教育関係者が地域とその歴史にどう向き合ってきたかを探ることは今後の課題でもある。(3) 常民大学以外にも、同時代には多様な学習組織による実践が広がっていた。こうした実践の歴史を辿ることは、現在進んでいる戦後史研究の重要な切り口にもなりうる。(4) 常民大学、自由大学をはじめとする多様な学習結社に注目することで、大学とは何か、教養とは何か、といった学習組織や学習内容、さらには教育理念の根幹部分を問い直す視座を得ることができる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

- ① 中小路久美代, 岡田猛, 川嶋稔夫, 山本恭裕, 新藤浩伸, 木村健一, 影浦峡「文化的な公共空間における触発する体験」サービソロジー 3(2), pp. 10-17, 2016, 査読有
- ② SHINDO Hironobu, SHIMIZU Kakeru. Struggling Regional Museums in Japan: Towards Fourth-generation Museum for Sustainable Community. Reshaping regional identities - making new memories, preserving the old : proceedings of the 2013 ICR conference, Rio de Janeiro, Brazil, 10-17 August 2013. pp. 48-49, 2016 (2013年の国際学会報告の要旨), 査読有
- ③ 新藤浩伸, 清水大地, 清水翔「美術教育者としての学芸員の意識—質問紙調査から—」美術教育 (299), pp. 26-34, 2015, 査読有
- ④ 新藤浩伸, 清水大地, 清水翔「学芸員の教育に対する意識の形成」東京大学大学院教育学研究科紀要 (54), pp. 161-178, 2015, 査読有

- ⑤ 堀口裕美, 新藤浩伸, 岡田猛「アメリカにおけるミュージアムの教育プログラム—東部の美術系ミュージアムを中心に」(研究ノート) アートマネジメント研究 (15), pp. 64-77, 2014, 査読有
- ⑥ 新藤浩伸「1970年代以降のイギリス文化政策の改革をめぐる諸論 : 成人教育との関連を中心に」都留文科大学研究紀要 (80), pp. 139-153, 2014, 査読有

[学会発表] (計5件)

- ① SHINDO Hironobu. *Public Halls in Postwar Japan: Stage for Community Music*. 32nd ISME World Conference on Music Education, 2016年7月25日、Glasgow Royal Concert Hall, UK
- ② 新藤浩伸「市民文化活動支援のネットワークの歴史と実践 : Mailout および CultureActionEurope を対象に」文化経済学会 (日本) 研究大会, 2015年7月5日、駒沢大学
- ③ 新藤浩伸「中井正一の「地方文化運動」の実践 : 社会教育史における疎開文化人の活動の位置づけに関する考察」日本社会教育学会研究大会, 2014年9月27日、福井大学
- ④ SHINDO Hironobu. *Public Hall as the Site of Cultural History of Community*. 31st ISME World Conference on Music Education, 2014年7月25日、Pontificia Universidade Católica do Rio Grande do Sul, Brazil.
- ⑤ 中小路久美代, 山本恭裕, 川嶋稔夫, 木村健一, 岡田猛, 新藤浩伸, 影浦峡「ミュージアムにおける触発する体験と体験を触発するということ」人工知能学会全国大会, 2014年5月13日、ひ

めぐりホール

〔図書〕(計6件)

- ① 北田耕也監修, 地域文化研究会編『地域に根ざす民衆文化の創造 「常民大学」の総合的研究』藤原書店, 2016, 総576頁(編集委員および以下分担執筆。新藤浩伸「木村素衛の表現論と長野における社会教育実践」pp. 92-107, 新藤浩伸「中井正一の「地方文化運動」と青年たち」pp. 108-125, 新藤浩伸「柳田国男研究会」pp. 448-463)
- ② 文化経済学会編『文化経済学:軌跡と展望』ミネルヴァ書房, 2016(編集委員および以下分担執筆。新藤浩伸「人材育成」pp. 305-319)
- ③ 中小路久美代, 新藤浩伸, 山本泰裕, 岡田猛編『触発するミュージアム—文化的公共空間の新たな可能性を求めて』あいり出版, 2016, 総255頁
- ④ デヴィッド・J・ジョーンズ著, 新藤浩伸監訳『成人教育と文化の発展』東洋館出版社, 2016, 総276頁
- ⑤ 佐藤一子編『地域学習の創造: 地域再生への学びを拓く』東京大学出版会, 2015(以下分担執筆。新藤浩伸「博物館構想の展開と地域学習」pp. 199-224)
- ⑥ 新藤浩伸『公会堂と民衆の近代: 歴史が演出された舞台空間』東京大学出版会, 2014, 総455頁

〔産業財産権〕なし

〔その他〕

(1) 雑誌記事・報告書(計5件)

- ① 新藤浩伸, 山崎功「対談 地域を元気にする芸術・文化の営み」月刊社会教育(733) p. 3-11, 2016年6月
- ② 新藤浩伸「博物館をめぐるアクティビティ構築の試み—千葉県柏市「くるるセミナー」の報告を中心に」学習基盤社会研究・調査モノグラフ9『持続可

能で価値多元的なまちづくり—プロジェクト志向の生涯学習へ 2012-2014年度科学研究費助成事業(基盤研究C)「学習を基盤とする持続可能で価値多元的な社会モデルの構築(研究代表者: 牧野篤)研究報告書, 東京大学大学院教育学研究科社会教育学・生涯学習論研究室, pp. 103-122, 2015年9月

- ③ 新藤浩伸「東京の歴史を見つめた舞台」東京人(352), p. 7, 2015年3月
- ④ 新藤浩伸「町民が描く内灘の未来—「おわりに」に代えて—」学習基盤社会研究・調査モノグラフ6『当事者になり続けるといふこと—内灘町公民館調査報告2—』東京大学大学院教育学研究科社会教育学・生涯学習論研究室, p. 135, 2014年11月
- ⑤ 新藤浩伸「国際博物館会議第23回大会(ICOM Rio 2013)報告」文化経済学11(2) pp. 74-75, 2014年9月

(2) 書評・書籍紹介(計5件)

- ① 新藤浩伸「書評『内子座』編集委員会編『内子座 地域が支える町の劇場の100年』学芸出版社, 2016」文化経済学13(2), pp. 85-87, 2016年9月
- ② 新藤浩伸「東大教師が新生にすすめる本」UP(522), pp. 14-15, 2016年4月
- ③ 新藤浩伸「書評『大田堯自撰集成』全4巻, 藤原書店」月刊社会教育(713), pp. 46-47, 2015年3月
- ④ 新藤浩伸「自著紹介『公会堂と民衆の近代 歴史が演出された舞台空間』ほん(東京大学生協「ほん」編集委員会)(390), p. 15, 2015年2月
- ⑤ 新藤浩伸「自著を語る『公会堂と民衆の近代 歴史が演出された舞台空間』」社全協通信(256), p. 15, 2015年1月

(3) 講演・講座 (計 13 件)

- ① 新藤浩伸「公会堂～歴史が演出された舞台空間」『公会堂一歴史を受け継ぎ、未来を拓く』～東京・大阪・名古屋 “3大公会堂” シンポジウム～, 2017年1月28日, 名古屋市公会堂
- ② 高島知佐子, 水戸雅彦, 真田弘彦 (パネリスト), 新藤浩伸 (モデレーター) 「公立文化施設が目指す目標と実態の狭間」文化経済学会<日本>2016 秋の講演会 2016年10月29日, 日本大学駿河台キャンパス
- ③ 新藤浩伸, 佐藤克明「アートマネジメントにおけるワークショップの位置づけをめぐる」静岡大学 アートマネジメント人材育成のためのワークショップ100, 第3回, 2016年7月19日, 静岡大学
- ④ 新藤浩伸「大人の学びと文化の発展」ラーニングフルエイジング研究会「学びあふれる社会のために, 芸術文化活動ができること」2016年2月16日, 東京大学情報学環・福武ホール
- ⑤ 新藤浩伸「飯田の可能性」2015年12月9日, 長野県飯田市
- ⑥ 新藤浩伸「ドイツの教育実践を支えるもの」シンポジウム「ドイツと日本の芸術教育, 文化環境の比較と可能性」, 2015年10月21日, ドイツ文化会館
- ⑦ 新藤浩伸「地域社会におけるミュージアムの存在意義とは-法の体系からミュージアムを考える-」学芸員技術研修会, 2015年9月21日, 福岡市美術館
- ⑧ 新藤浩伸, 田村栄作, 村田修治, 吉田敬, 高野英江「地域まるごと博物館」柏市豊四季台くるるセミナー(全5回), 2015年6月
- ⑨ 大内俊, 新藤浩伸「今あらためて地域における公民館の役割について考え

る」第9回田無公民館まつり, 2015年5月16日, 西東京市田無公民館

- ⑩ 新藤浩伸「市民がつくるつどいの場—グループ活動と公民館」第30回中央公民館のつどい学習会 2015年3月7日, 狛江市公民館
- ⑪ 新藤浩伸「公会堂と民衆の近代—歴史が演出された舞台空間」日比谷公会堂サポーター会員イベント, 2015年2月2日, 日比谷公会堂
- ⑫ 新藤浩伸, 田村栄作, 村田修治, 吉田敬「博物館での学びを楽しむ」柏市豊四季台くるるセミナー(全4回), 2014年11月
- ⑬ 新藤浩伸, 田村栄作「ミュージアムへの誘い—ものと語り合うこと」豊四季台くるるセミナー第1回 東大セミナー「語りを通して自分を知る」, 2014年6月18日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

新藤 浩伸 (SHINDO, Hironobu)

研究者番号: 70460269

所属名: 東京大学

部局名: 大学院教育学研究科

職名: 准教授

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし

(4) 研究協力者